



布施だより

《響き合う歌声づくり~中庭コンサート~ 人権を考える日~命を慈しむ日~》

今年の学校グランドデザインの重点のひとつに『響き合う歌声づくり』を位置づけています。学級で歌うひとりひとりの歌声が、学年で奏でられる大きな歌声につながり、全校生徒677名で響かせる大きな歌声となり、合唱に託した感動と想いが交流し合える、そんな場を共有していきたいと願っての重点です。

5月1日(金)に「中庭コンサート」が開催されました。淡いピンクと白の花をつけたハナミズキの咲く、1年で最も新鮮な空気をまとった中庭で歌声の交流が行われました。2学年諸君が『絆』を、3学年諸君は『心の中にきらめいて』をそれぞれ披露してくれました。1学年諸君は日差しが強くなった中庭で、じっとその歌声に耳を傾けていました。『響き合う歌声作り』に込めた願いに、「成就感・達成感・信頼感」があります。奏でられた歌声の美しさに、それまでのより良いものを追究するという達成感を仲間と味わいたい、歌声を通じて共にいることの信頼感を味わいたい、というものです。互いを尊重し合える眼差しが歌声に反映させることを願いつつ、最後に昭和50年(1975)に作られ、これまでずっと歌い継がれてきた『生徒会歌』を心ひとつにして全校生徒で歌いました。

この中庭コンサートに先だつての4月28日(火)は、篠ノ井西中学校にとって大切な『人権を考える日』でした。1.2時間目に生徒会主催の「人権集会」が西体育館で行われました。最初に学校長から「人権を考える日」に寄せて講話がありました。

今から28年前の4月22日、当時、本校の2年生だった上原夕子さんが「この世の中にいじめがなくなりますように」という言葉を遺書に残し、自ら命を絶ちました。

今日の「人権を考える日」は、この過去のつらく悲しい出来事から、命の大切さや人権を尊ぶことの大切さを学び、今を生きる私たちが二度とこうした出来事が起きないよう、いじめを絶対に許さない決意を新たにします。そして、誰もがよさが認められ、居場所がある学級、学年、学校づくりをしていくために、自分自身を見つめ直し、今、自分はどう行動すべきか考える日です。

これから皆さんにお話しすることは、実際にあった出来事です。いじめに出会ったとき、どうすればいじめをなくせるか、今も私の心に強く刻まれていることをお話しします。

以前、ある中学校の、2年生のクラスでいじめがありました。いじめを受けた生徒は女子で、Aさんと仮に呼びます。Aさんに対するいじめがあると分かったのは、Aさんの友達の3人の女子が担任の先生に相談に行ったからです。3人の女子からの話で、クラスで何が起きていたのかだんだん分かってきました。Aさんをいじめていたのは、クラスの複数の男子でした。具体的にどんなことをしていたかということ、Aさんとすれ違うときに変な声を出す。Aさんの方を見て、ヒソヒソと笑いながら何かを言い合う。掃除が終わった後、わざとAさんのイスだけ降ろさない。

結論を言うと、Aさんに対するいじめは、しばらくしてなくなりました。いじめが分かったのは1学期でしたが、2学期になり、3学期になっても、そして3年生になっても、Aさんに対するいじめは全くななくなりました。その先生は、心配だったので時々Aさんの様子について、訴えてきた3人に聞きましたが、その度に「先生、もう大丈夫です」と答えてくれました。いじめは完全に解決されました。

さて、Aさんに対するいじめがなくなった「一番の理由」は何だったと思いますか? 「先生が、いじめている人を厳しく注意したから。」これは違います。いじめている人を厳しく注意しただけで、いじめを完全に解決するのは、難しいです。いじめる側は、嫌がらせをしたのは、相手のせいだと必ず言います。また、いじめているという意識や、罪の意識がまったくないことがほとんどです。よく聞くのは「ふざけていただけ」という言い訳です。ですから、なかなか反省することができません。では、いじめがなくなった「一番の理由」は、いったい何だったと思いますか?

一言で言えば「いじめの構造」がなくなったからです。どういうことかということ、傍観者が支える人になったということです。傍観者の立場にいた、やめさせたいと考えていた生徒が、Aさんを支える人になっていったからです。そして、次第に、つられていじめをしていた生徒がいじめ行為をしなくなりました。やがて、いじめの構造は跡形もなくなりました。こうして、Aさんに対するいじめは完全に解決されました。「傍観者」が、「支える人」になっていったといいましたが、「傍観者」と「支える人」の違いは、何でしょうか? それは、行動するかどうかです。このクラスでは「傍観者」だった生徒が、どんな行動をしたかということ。まず「3人の女子が、生徒同士で、Aさんのことについて相談した。」これがAさんを支える最初の行動でした。そして、「先生に相談した。」これが2番目の支える行動でした。さらに「仲間にはたらきかけ、支える仲間を増やしていった。」仲間と話してみると、同じ気持ちでいた人が、何人もいました。そして、「Aさんを一人にしないように、いつも行動をともにした。」Aさんを嫌がらせの行為から守るためでした。その後、最初の3人の女子以外の生徒が、「掃除が終わった後、一つだけ降ろさわれていなかったAさんのイスを下ろしました。」いじめている男子が見ている中、大変な勇気が必要だったと思います。このように、勇気を持って行動すること、それが「支える人」になるということです。

私は、この出来事で、いろいろなことを感じました。ひとつは、いじめをなくすには傍観者の力が絶対に必要であるということです。そして、もうひとつは、いじめのあるクラスは、全員がダメになるということです。い

いじめの構造

いじめをする人



(観察)

嫌がらせ

Aさん



傍観者

(何もしない人)



じめられている人はもちろんのこと、いじめている人も、傍観者も全員です。いじめは、そのクラス全員をだめにします。クラス全体が殺伐とした空気に包まれ、誰もが仲間を信頼しなくなり、みんな自分のことだけを考えるようになります。当然、クラスはバラバラになっていきます。

Aさんのクラスもそうなりかけていました。しかし、Aさんのクラスはいじめを解決してから大きく変わりました。クラス全体に暖かい空気が流れ、一人一人が明るくなりました。そして、一人一人が互いを思いやるようになりました。クラスがまとまり、みんなで一つの目標に向かって力を合わせるようになりました。そして、一人一人が自分のよさを伸ばせるようになったのです。

今日は、いじめを解決するために、先生は何をしたのかについては触れませんでした。簡単に言うと、「傍観者を、Aさんを支える側に変えるために、力を尽くした」ということです。先生たちの力だけで、いじめを完全に解決することは困難です。先生たちと皆さんが力を合わせる事が、絶対に必要です。

皆さんに、最後の問いです。「今、自分の周りにいじめはないか?」「もしいじめがあるとしたら、自分はどの立場か?」「自分は、今、何をすべきか?」上原夕子さんがなくなった年、その時の生徒会長に、本校の初代校長の竹内隆夫先生から手紙が届いたそうです。その中にこんなことが書かれていました。

～例えば掃除中、真面目に働いている仲間の側で平気でおしゃべりをしているようでは、仲間への思いやりが足りません。そういう生活が改まらなければ、本当の意味で、いじめがなくなったとは言えないと思います。～

この投げかけを受けて、生徒諸君は学級に戻って「学級の人権宣言」を考えます。1年生の教室の追究の様子です。司会の生徒はグループ学習で、「学級の人権宣言」をみんなの話し合いで創り出すべく考えを交流させようとしますが、なかなか追究が深まりません。(でも、ちゃんと呟いているんですね。「支える人になる。」「キーワードは差別やいじめをなくすこと。」「傍観者にならないように。」・・・等々。前の時間、全校集会で身につけた言葉をちゃんと口にしていきます。やっぱり、このボソボソと呟くやりとりがいいです。) そんな呟きがなかなか話し合いの核にならず散漫になってしまいます。しびれを切らしてしまった司会の生徒は決まろうとします。(これも、学級会でよく目にする光景です。)

でも知らず知らずの内に「傍観者」になってしまっていた集団を先生が諫めます。「もっと想像力を働かせてください。判断力を身につけてください。先ほどのグループの話し合いで傍観者になってしまっている仲間が何人もいましたよ。それはいじめの場面だけじゃないんだよ。自分は関係ないって表情の人がいました。内容も大切ですけど、みんなが考えて、みんなが決めたことにしてほしいんですよ。この『学級の人権宣言』は。」先生の一喝を受けて再び、決まります。生徒たちの表情が、挙手の角度が違ってきます。傍観者ではなく、手を挙げて行動することで、話し合いに真っ直ぐに参加し、話し合いを支えようとする変化が現れた瞬間でした。



ひとりひとりの生徒にとって、そして私たち大人自身にとって〈命を慈しむ〉ためのかけがえのない時間を過ごした4月28日(火)でした。

《 団結するとき ～体育集会を通じて～ 》

焼けるような日差しの中、12日(月)に「体育集会」が行われました。全校生徒が『西中体操』で体をほぐした後、『学級対抗リレーと大縄跳び』に挑戦しました。砂埃が舞い上がるグラウンドに大きな歓声とガッツポーズとハイタッチが交換されていました。4月のスタートから学級作り・仲間作りが行われているこの時期だからこそ、この「体育集会」に意義があります。生徒たちはこの集会に向けて、体育の追究の時間に、学級活動や放課後の時間に、気持ちを揃えて団結することの大切さを学んでいきます。どうすればより上手にバントンスができるだろう、回数を増やすにはどんな跳び方をすればいいだろう・・・上手いかないもどかしさやいらだちを時に表現しながらの、この「体育集会」に向けての追究でした。

○私は声を出すのや発言するのがかなり苦手ですが、今まではそういう人たちに囲まれていたので、そんな自分のままでした。この前の体育の授業でも、誰が縄を回すのか男子がもめていてしばらく練習ができなかったんですが、そのとき私は男子の間で起こったことだしとか、男子と話したことないしとか、その状況が周りのみんなも嫌そうだけど誰も何も言わないしとか、色々理由をつけて何も言えませんでした。それまでで、一番の記録を出したときも、時々何人か抜けたりとかかして、本当の記録とは言えません。その時も私は何も言えなかったんです。これから、少しでも自分の考えを言えるようになりたいです。

気持ちを揃えて団結するためには、どうしたらいいのか。仲間の得意・不得意を理解し合い、尊重し合うにはどうしたらいいのか。その答えが毎日の日常生活にあることに生徒たちは少なからず気づいています。毎日の学習に背筋を伸ばして向き合うこと、仲間の発言や考えにきちんと耳を傾けること、清掃の15分間ひとりになりきって床と向き合うこと、給食の準備を公平に行えること。響き合う合唱に心寄せること・・・そんな毎日の当たり前前の積み重ねこそが団結するために必要なんだ、と感じ始めたかけがえのない時間でした。集会を終えての生活記録です。

○体育集会がありました。特にリレーは学年ベスト3に入れなかったけれど、(予選で)○○君が競り合って1位でゴールしたあの瞬間はまだ心に残っています。バトン練習通りに渡せたら、みんなの手の汗で必死さが伝わってきて、「私もわずか50秒だけど、頑張らなきゃ」と思って走りました。差が開いても助け合って、追いつけるところが何度かありました。ベスト3も大切だけれど、よりクラスの友だちを思う気持ちが育ったなあと思いました。本当にいいレースでした。

集会を終えて、追究を通じて、生徒諸君はもっと仲間と関わりたい、もっと助け合いたい、もっと相手のことを理解したい・・・そしてそのために何をしていったらいいのか・・・この経験と触れあいから得たことを、ずっと大切に考え続けてこれからの生活に活かそうとしてくれる生徒たちがいます。

